存在の探求
―抽象絵画から哲学へ―

岡野利津子

（学習院大学講師・学習院西田幾多郎博士記念館・哲学博士）

2012.11.15　ユング心理学研究会

自己の存在に対する問い

自己の起源　→　両親、先祖

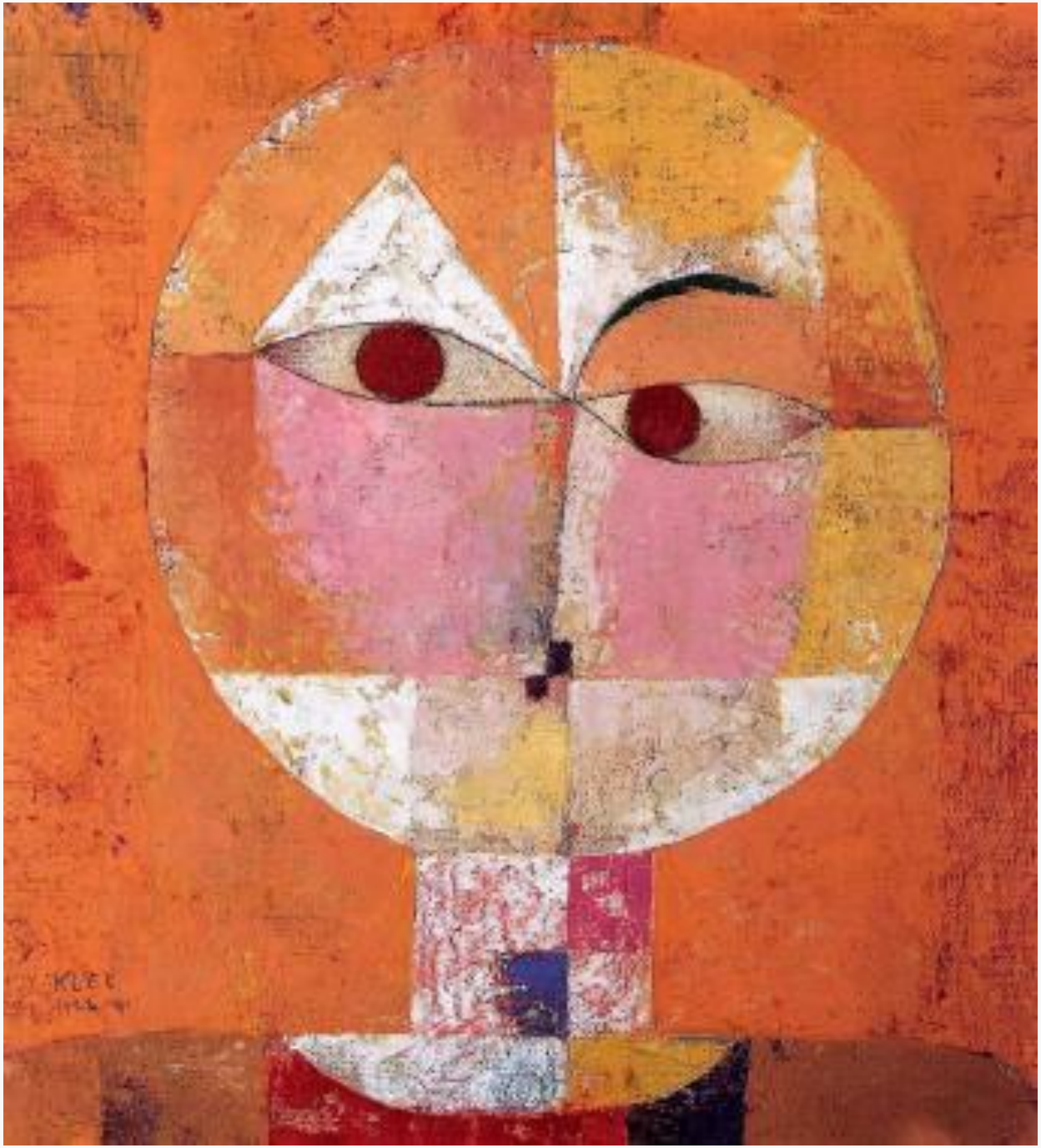
又は

→　魂の出処

（「自分はどこから来て、
なぜここにいて、
どこに行かなければならないのか？」
というような問いだった。）

芸術との出会い

　自己の存在の存在性についての問いに対する最初の答えは、芸術の中にあった。
　小学校の高学年になった頃、近所に児童館ができ、美術全集が置かれた。特にインパクトを受けたのが、パウル・クレー（1879-1940年）とパブロ・ピカソ（1881-1973年）だった。



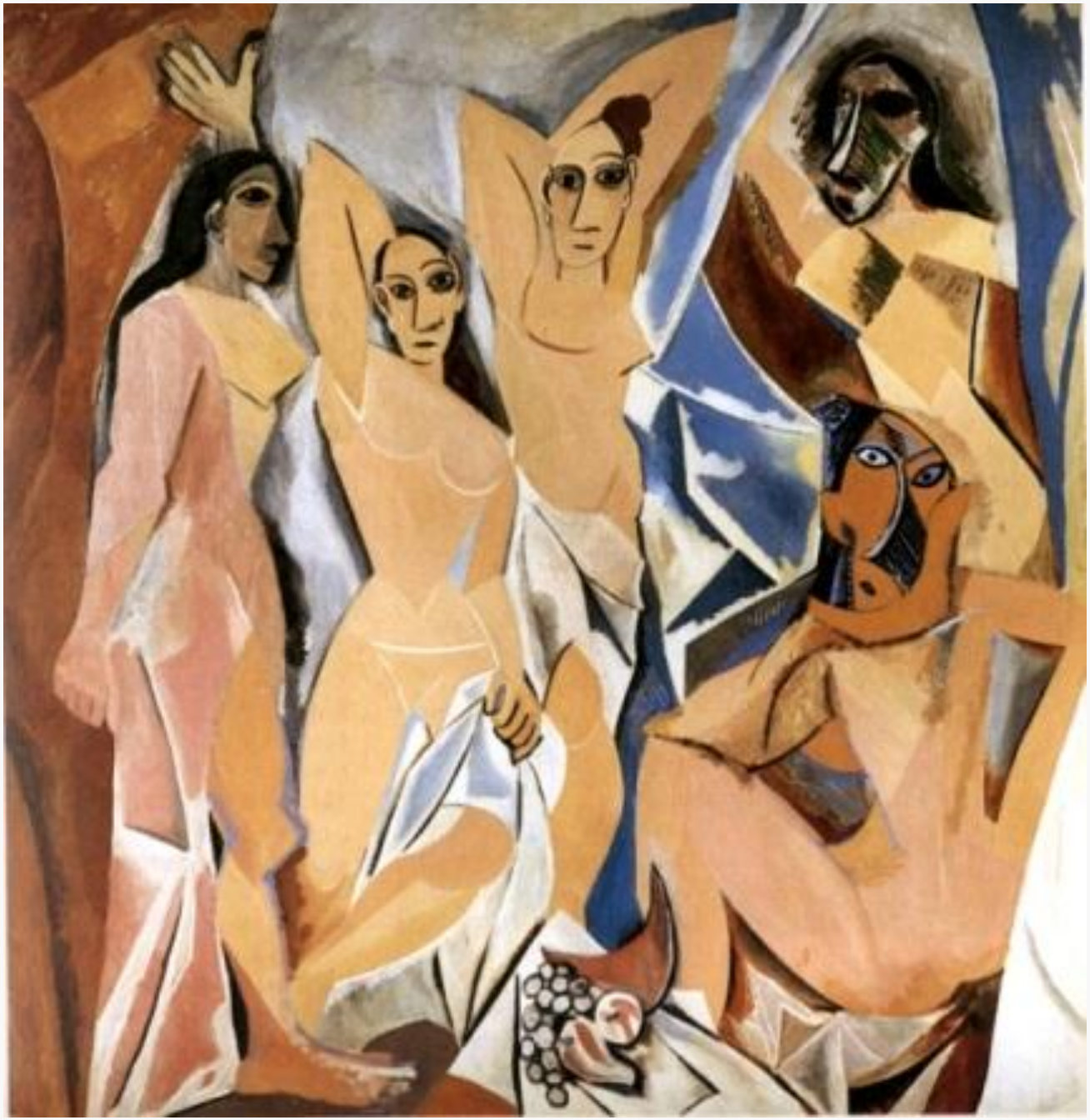
クレー
「さわぎく」

1922年

（山形県学校美術館のＨＰより）

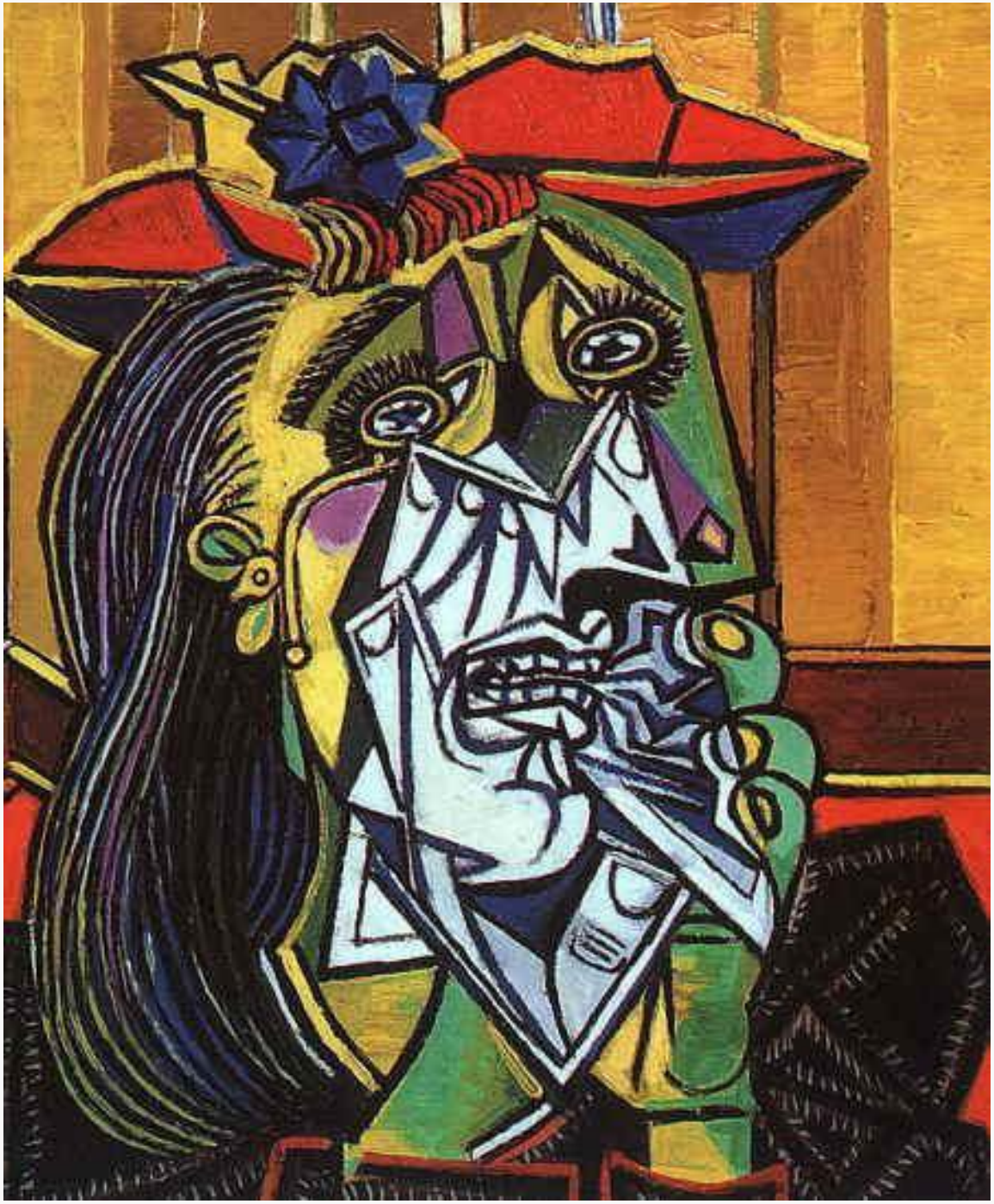
「見えるものの形をそのままかくのは、私の仕事ではない。カメラのすることだ。」
「私は、かこうとするものの心をとらえたいのだ。」
「私がかく顔は、本物の顔よりも、もっと本物らしく見えるのだ。」

クレーは、自分の絵についてこんなことをかいています。
クレーには、サワギクの花が、かわいらしい女の子の顔に見えたのです。



ピカソ
「アヴィニョンの
娘たち」

1907年



ピカソ
「泣く女」

1937年

芸術と芸術でないものとの違いは何か？

当時、自分でも絵を描いていたが、自分の絵と
「芸術」と言われるものとの違いが気になった。

→　芸術を芸術たらしめる
　　何か＜或るもの＞があり、
　　この世の多くのものにはそれが＜無い＞。

→　「在るもの」と「無いもの」という考え

岡野
「ばら」

1976年

非物質的対象

「このように見えた」と言っても、視覚に異常があって、そのように見えるわけではない。
　物質的・肉体的視力の他に、非物質的・非肉体的視力があり、その視力にそう見える。

非物質的な視力によって見られる対象
　→　イデア
　（ギリシア語で「見られたもの」という意味）

非物質的対象の先在性（pre-existence）

「その非物質的な対象（在るもの）は、私が物質的な材料を用いて描く以前に、既に存在している。」

→　それが存在している非物質的な世界（在るものの世界）がこの物質的な世界に先立って存在している。

存在の起源

「私の身体に先立って存在しているのも、そちらの世界であり、私の魂もそちらからこの世にやって来ている。」

「自分がどこからやって来ているのか」という例の問いに対する、差し当たりの答えとなった（更に多数の「在るもの」の起源が問題となる）。

非物質的対象：物質的対象
（「在るもの」）
||
原型：模倣

「『在るもの』は、それ自体は物質的な形象も色ももたないが、それとそっくりな写しを物質的な材料を用いて、具体的な色と形とで表現できる。」

「似てはいるが、『在るもの』の方が完全」と感じた。

プロティノス（205-270年）

古代ギリシア哲学末期の思想家で、
西洋神秘主義哲学の祖。

プラトンとアリストテレスを綜合し、
西洋哲学史上、多大な影響を与えた。

プロティノスの形相論

「在るもの」にあたるもの　：　作品にあたるもの

形相（イデア）　：　生成物
非物質的対象　：　物質
（不可視の対象）　（感覚対象）
（無形の形相）　（形のあるもの）
知性界の対象　：　感性界の対象
原型　：　模倣
在るもの　：　在らざるものとの混合物

ロゴス（形成原理）

「形相」＝「ロゴス」
（言葉、理性、説明、形成原理）

見えざる「形相」を観ることにより、
「ロゴス」の形成力にあずかって制作する。
（いわゆるインスピレーション）

モーツァルトの例

「モツァルトは楽譜を作る場合に、長き譜にても、画や立像のように、その全体を直視することができたといふ」
（西田幾多郎『善の研究』第１編、
第４章「知的直観」より）

直視の対象＝形相
→　その全体を順次に展開できる。

形相は、別の素材を用いて、
別の仕方で表現し得ると考えられる。

無形の形相（直視の対象）
↓
表現の例
　表象作用を通じて表現した場合→絵画
　推論的思考作用を通じて表現した場合→哲学論文

岡野

2009年